

異文化理解を目指す日中同形語の研究 (2)

— 日本の中学校・高等学校における授業実践 —

秦 春 芳

(2008年10月2日受理)

Study of Words Having Similar Chinese Characters in Chinese and Japanese Languages for
Advancement of Intercultural Understanding

— Course practices conducted in Japanese junior high and high schools —

Qin Chunfang

Abstract: Words having similar Chinese characters (kanji) in Japanese and Chinese are considered as special features in a kanji-based cultural sphere. As these similar characters are present in a large amount in both languages, they were considered with a particular importance in previous studies on Japanese language. To date, lots have been done in this field of research, both in Japanese language education in China and Chinese language education in Japan. However, although such research greatly contributes to international exchange between the countries, statements on the effective use of research achievement are scarce. Course practices using words with similar kanji in Japanese and Chinese languages, found in previous linguistic as well as intercultural understanding research results were conducted in Japanese junior high schools and high schools in order to find a new form of study of these words with the same kanji in both languages. During the practices, the students showed a strong interest and understanding of Chinese language and culture through the use of those shared kanji, but they were not able to self evaluate, nor realize the same mechanism in their own language and culture. However, by experiencing the study on the use of these common kanji between the two countries' language, students came up with a new understanding and knowledge of foreign language and foreign culture through kanji learning classes. Therefore, it can be concluded that up to some extent, the aim of class practices focusing on foreign linguistic exchange as well as intercultural understanding was achieved. To conclude, based on the results of the application of findings from theoretical studies in relation to education and intercultural understanding, course practices could lead to a new form of study of Similar characters in Chinese and Japanese languages targeting intercultural understanding through efforts from linguistic research achievements.

Key words: intercultural understanding, words having similar Chinese characters in Japanese and Chinese, course practices, linguistic research study; effective use

キーワード：異文化理解、日中同形語、授業実践、語学研究、活用

0. はじめに

中国で創られ、その後、周辺諸国に広がった漢字は、現在ではわずか数カ国にしか用いられていない。そのなかで、日本と中国では現在も漢字が依然として活発に使用されている。漢字が音形義を一体にまとめる特質を持っているため、「漢字が語である」という認識は程度に差があるものの、日中両国の間に存在している。そこから日中同形語という発想が生じてくる。

言語学における「同形語」の「形」は形態、音韻と解釈されるが、中国語では「形」と言えば、漢字そのものがイメージされる。また、日中両国が同じく漢字文化圏にあるため、本稿における日中同形語は、形態論上の同形語ではなく、原則上、荒川（1979）に基づいて、日中両語で同じ漢字で表記される語を指す。また、日本と中国がそれぞれ独自に文字改革を進め、漢字の簡略方法などにも違いがあるため、日中両国の漢字の字体に相違が現れている。そこで、本稿ではこれらの表面的な不一致を許容範囲に含め、現行の日中両国で使用されている漢字の字形・字体の差異を問題にしないことにする。

日中同形語は特殊な言語現象であり、日中両語に大量に存在するため、従来、日中言語の対照研究及び国語学分野で重要な研究対象として扱われてきた。先行研究では、意味・用法の異同や文法的差異などさまざまな側面や、教育、翻訳及び辞書の編集など多角度から、共時的あるいは通時的な研究が行われてきた¹⁾。これまでの日中同形語研究は、語学研究成果の活用に関する論著が少ないというような問題点が存在するものの、豊かな成果を収め、日中の言語研究、両国語間の対照研究、及び中国の日本語教育と日本の中国語教育、更に国際交流に大いに貢献しているのも事実である。本稿では、この日中同形語という漢字文化圏の特殊現象を利用して、語学研究成果の日中異文化理解への有効な活用形式を探りたいと考える。

なお、本稿は「異文化理解を目指す日中同形語の研究—日本の小学校における授業実践—」²⁾に続くものである。

1. 研究の目的

これまで発表された日中同形語に関する研究において、実用面（自動翻訳システムなど）での応用が指摘されているが、研究成果の有効活用に関する論述は管見の限り、あまり多くないようである。しかし、紙面上の知識をどのように一般人の日常生活に取り入れて、語学から「離れている」日常の文化生活を豊かに

し、国際交流・異文化理解に役立てるのかというように新しい視点から同形語研究に意味づけをしようとする研究も必要だと考える。

そこで、本稿は、日中同形語研究成果を利用して学校で授業実践を行うことを通して、語学研究と異文化理解との結び付きを探ることが可能と考え、日中同形語を用いた授業実践で成果を挙げることによって、語学研究成果の言語教育（自国語教育と外国語教育を含む）と異文化理解への活用という日中同形語の新たな研究方向と研究形式を提示することを目的とする。

2. 日中同形語を用いた授業実践

日中同形語の研究には語学研究成果の枠組みを越えた新しい視点と形式が必要である。その新しい視点と形式を提示するための一つの試みとして、筆者は平成16年10月に、愛媛大学教育学部附属中学校と愛媛大学農学部附属農業高等学校において、異文化理解を目指して、日中同形語を用いた授業実践を行った。

2.1 授業実践の実施背景

2.1.1 学校の漢字学習の実情

日本の学校では昨年、高等学校で生徒が漢字能力検定試験を受けるという傾向が現れている。それは就職のため、或いは自分自身に力をつけるためなど、さまざまな事情がある。そして、積極的に勉強しようとする生徒はあまり多くないようであるが、なかには、漢字学習を重んじない生徒もいる。小・中学校では単元ごとに新しく出た漢字について、国語の授業でテストが行われるようである。そのため、漢字と言えば、つまらなく、暗記させられる、或いは、時には罰として漢字の聞き取りをされるということが原因で、漢字について良いイメージを持ってなくなってしまふ。年頃の子どもの心理を考えると、ちょうどたくさんの物事に目が惹かれる時期に、あまりおもしろくないと思われがちの漢字学習に興味を持たせるのは確かに困難なことであろう。したがって、「そんなに時間を掛けたくない」「覚えられるものなら、自然に覚える」「無理やりに覚えるのがいやだ」などの声をよく耳にする。そこで、教師が新しい視点を持って、子どもたちの漢字・漢字学習に対する理解や見方を修正することが大切になる。現場の教員はさまざまな工夫をしているようであるが、教員と違った立場の人が授業の指導を試みることはそれほど多くなかろう。象形文字などの成り立ちを教材としたものもあるが、その一方で、漢字を具体的な場面（例えば、異言語環境という設定）を通して理解し、楽しみながら身に付けることができると考えられる。具体的には、同じ漢字文化圏にある日本と

中国で共通する漢字に着目し、漢字文化圏にしか存在しない同形語現象を用いて異国文化を取り入れた授業が、子どもたちの漢字学習や外国語学習、更に異文化理解に対する態度・考え方の改善に効果的であると考えている。

2.1.2 総合学習カリキュラムの設定

現在の学習指導要領では、「生きる力」の育成を目指し、国際理解、環境、情報、福祉・健康など、これまでの教科の枠を超えた学習などができる「総合的な学習の時間」が新設されている。それによって、国際理解が総合学習として新たに位置づけられている。この総合学習の授業で学んだことが、知識として生徒の身に付いたり、今後生徒が多くの分野に興味・関心を持つのに入門案内のような啓蒙的役割を果たしたりし、生徒がその授業で興味を持って楽しく学ぶことができることがこの総合学習の一番の目的とみられる。

国際理解や異文化間交流は、生徒の身近な生活から始めるのがよいと言えよう。生徒は日常生活の大半を学校で勉強して過ごしている。したがって、文字は生徒にとって最も身近な存在だと言っても過言ではない。周知のように、日本語には漢字語がたくさん含まれている。学校生活が主である生徒は、普段同じく漢字を用いている中国語と接する機会はそれほど多くなかろう。また、同じく漢字文化圏にある近隣の中国の言葉—中国語—に対して、毎日使っている最も身近な言葉である日本語に対して、そして、共通する漢字文化を持っている両言語の関係に対して、必ずしも明確な考えを持っているとは限らない。そこで、総合的な学習の時間を利用して、生徒たちにとって身近な漢字語を取り上げ、日本語にも中国語にもあるような同形関係を成す言葉を紹介し、またその現象の裏にある文化も明らかにすることによって、異国の言語と文化を実感することができ、総合学習の国際理解の目標に達成することもできると思われる。つまり、総合的な学習の時間の新設は学校での授業実践の実施に不可欠な条件を整えたと言える。

2.2 授業実践の目的

小学校を含めて、前後3回にわたって行った授業実践の目的は、普段使い慣れ、親しみを覚える日本語の中の漢字語を、それと対応する中国語との比較を通して、驚きと同時に、漢字文化圏における漢字の独特のおもしろさ・素晴らしさを生徒に自らの経験で実感させ、日中同形語に接触することによって、両国の考え方や習慣の違いを理解してもらうことにある。更に高学年の場合、生徒に自国言語・自国文化への再認識を喚起し、他者意識・他国文化に対する興味・関心を持たせることもねらいとしている。

「灯台下暗し」という諺にあるように、人間はしばしば身近な物事に客観的に考える意識を持たない。そこで、他者との比較が必要になってくる。他者との比較を通して、他者が自分にとってはどのような存在なのか明らかになってくる。それだけではなく、他者と比較する中で、自分自身に対しても、他者の立場に立って考えることができるため、自己理解が深まり、自己発達・自己改善が促される。言い換えれば、自分自身への新しい発見やより深い理解が可能である。

国際化が主題になっている現在、学校教育を通じて、幼い頃から国際的経験をさせ、国際的意識を持たせることによって、子供たちは、心の中に自分自身もあれば、他者もあるというような現代人に育ち、「生きる力」を身につけることができると考える。本研究は、このような点も視野に入れて、授業実践の際に工夫をしている。

2.3 授業実践で用いた日中同形語

前述のように、本稿で日中同形語を扱う際、字形・字体の違いを問題にしない。しかし、学校現場での実践においては、「字の形」の問題が無視できない。実践では、日中両語において、字体の違いがほぼない語を「漢字で書くとほぼ同じ」と表現し、それに対して、実は同形語であるが、字体の違いで見た目では同じ語とは思えないような語を「漢字で書くと異なる」と表現することにする。つまり、本実践で用いられている日中同形語は以上の2種類を含む。

実践では、生徒たちにとって、授業で使う同形語を「同形」だと視覚的に受け入れられるか否かを考慮し、生徒たちが混乱しないように、簡体字と繁体字の概念を使わずに、日中両国でそれぞれ文字改革が行われたため、字体・字形に違いが生じているだけで、そもそもこれらの語は同じ形の語である（例えば、「新聞」と「新聞」）などの事情をその場で説明した。また、授業で用いる中国語の例文の方は現代中国語の簡体字を用いていることをあらかじめ説明しておいた。

2.4 授業実践の実際³⁾

今回の授業実践で日中両語を比較することを通して、中国語がすべて漢字で表記されていることはよく知られているが、日ごろ漢字仮名交じりの日本語を使い慣れている日本人は、日本語の中の漢字に対してどのような意識を持っているのかということについて、子供たちの反応を捉えたい。授業実践において、子供たちがどのようにどこまで日本語、中国語、及び日中両語の関係について考えられるのかは予測できないが、授業者は少しでも授業の目標に近づけるように工夫を重ねて授業を進めていった。

2.4.1 中学校における実践

対 象 愛媛大学教育学部附属中学校2年C組
(38名)

期 日 平成16年10月6日

授 業 名 漢字をカン(漢)違い?!

授業過程

今回の実践の具体的な展開を授業計画案【授業実践資料①】にそって以下に説明する。

まず、中国語での自己紹介から授業を始め、教室の雰囲気や和らげた。生徒たちは中国語に驚いたと同時に、授業に興味を持っている姿を見せた。

続いて、今回の授業は日中同形語についての話であることを明らかにした。日中同形語というのは「日本にも中国にもある同じ漢字で書く言葉」だとカードを使って黒板に挙げた。次に、「学校」「大意」「大丈夫」と三種類の同形語を用いた日中両語の例文を1つずつ黒板に貼り、それと同時に、授業者は生徒たちに「よく目を見てね」と示唆を与えた。すると、生徒たちは小声で議論したりする反応を見せた。

例文の意味について対訳文を挙げながら生徒たちが同形語に気づくように説明し、訳文の中における同形語の意味・用法が同じか否かを生徒たちに比較させた。中国語で例文が読まれるとき、「へえ〜」と興味津々に聞いたり、不思議な顔をしたり、まじめに黒板を見たりして、子どもたちの反応は積極的であった。特に、漢字ばかりで書かれた中国語や、中国語の漢字の書き方、発音などに生徒たちは興味を示していた。授業者はそれを受けて、同形語を意味・用法によって「ほとんど同じ」、「一部が共通する」、「異なる」と3種類に分類できると説明を進めた。例文に対する解釈と分類が終わったとたん、生徒たちの意味・用法が異なる同形語に対する反応が強く現れた。

次に、ゲームー中国人と筆談するという設定一する段階に移った。生徒たちがおもしろく、気楽に同形語の授業を楽しめるように、自ら参加してもらうことにした。中国人に通じるかなと思う日常的な同形語を想像させることによって、生徒たちの日中同形語に対する理解を深めようとした。授業者が「まわりの人と相談しながら、勘で挑戦してみよう」と声をかけると、生徒たちは活発なディスカッションを始めた。『国語便覧』まで使う生徒もいた。生徒たちが考える間に、黒板に日本語と中国語を書く空白の紙を貼り、時間になったら、生徒たちの挙手を求めて思いついた語を言ってもらった。生徒たちは限られた10語⁴⁾にいろいろな単語⁵⁾をどんどん挙げ、他人の発言を聞いてグループでコメントする場面も見られた。

同形語のつもりで言ってもらった語を授業者が中国

語に訳し、その訳語が日本語と同形語になるかどうかを判断した。そのとき、生徒たちは期待に満ちた表情で、授業者の説明を聞き、特に、表記の異なる訳語になるとときには、笑顔をみせたりしていた。生徒たちは授業に興味津々の様子であった。

次に、意味・用法が「異なる」同形語に注目した。まずは「顔色」「妻子」「新聞」「先生」「手紙」の5つの同形語を用いた例文を黒板に並べた。同時に、「文の中の赤ペンで書いている言葉⁶⁾は普通の日本語でしたら、何だと思う? また、その理由はなに?」と発問した。これは前と同じように、生徒たちに興味を持たせて、同形語について考えさせることがねらいであった。生徒たちを班に分けて、5つの語の中から1つ選ばせ、3分ほど議論させた。授業者が各班へ回ったとき、生徒たちは検討はしていたが、前ほど活発ではなかった。時間のことを考慮し、生徒たちのできたところまで発表してもらった。「新聞」に興味を持った生徒は多く、「顔色」に注目する生徒は特に少なかった。一つ目の質問は生徒たちから大体の回答を得ることができたが、二つ目の質問(具体的な理由)についてはほとんど述べられなく、「大体そんな感じですよ」くらいであった。発表されたものについて、異議を述べた生徒もいた。

生徒たちの発表が終わってから、授業者はその発表に対してコメントしながら、ねらいの語を発表した。用意した語を正解とする理由を生徒たちが納得するように、授業者はそれぞれの例文を用いて、文脈を考えるのは当然であるが、それと同時に、同形語、また、漢字表記にも注意して、漢字の意味をも考えるべきだと説明した。例文と同形語を理解した段階で、当たった生徒も外れた生徒も、皆納得して豊かな表情を見せた。

引き続き、同形語の意味・用法の差異及びその原因について説明した⁷⁾。ここで、同形語の異なった言語環境の中で生じた意味・用法の差異、及び発想や文化の差異によって生じた同形異義現象を生徒たちに理解してもらおうと努力した。

最後に、授業について、「日中両国が同じ漢字を持っているため、また、違った文化や習慣があるため、日中の同形語は意味・用法が同じであったり、違ったりする」とまとめ、また、授業についての感想などを記入してもらおうアンケート【授業実践資料②】を行うと同時に、板書をまとめたメモ⁸⁾を配布した。

2.4.2 高等学校における実践

対 象 愛媛大学農学部附属農業高等学校
(1年生と2年生: 8名)

期 日 平成16年10月27日

授業名 日中の架け橋—同形語

授業過程

今回の実践の具体的な展開を授業計画案⁹⁾にそって以下に説明する。

今回の授業が中国語と関係するものであると明らかにした上で、生徒たちに興味を持たせるために、授業者はまず中国語で、それから日本語で自己紹介をした。次に、授業の内容は日中同形語についての話であることに言及した。中国語のとき、生徒たちは好奇心を持って笑顔で聞いていた。

続いて、実践の目標を念頭に置き、生徒たちが最初から授業に参加するように、授業者は「日中共通するところって言ったら、何がイメージしますか。」と質問をしたが、生徒たちは直ちに「漢字」と答えた。それを受け止めて、「漢字が共通しますから、漢字によってできた漢字言葉、漢字語も共通することもありうる」と日中両国における同形語の話題を持ち出し、授業への導入を実現した。

次に、日中両語を用いた例文を使って日中同形語の分類について説明した。授業者側の進め方としては中学校での場合と大同小異であるため、ここでは詳細は述べず、生徒たちの方の反応を中心に述べていく。授業が進む中で、高等学校の生徒たちはずっと考える顔をして静かに黒板を見ていた。これは、小中学生が考えることをすぐ口に出したりするような盛り上がり方とは違い、直接中国語の発音をまねたりするような動きも見られず、皆ただ真剣に耳を傾けて考えながら聞くというような表情を見せていた。小中学校での授業風景とは完全に異なるものであった。

引き続き、中国人と筆談するという設定のゲームに入った。この段階で、前回とは違って、授業の雰囲気や和らげ、生徒たちに活発に発言させるために相当努力した。生徒たちは真剣に考えた後、良い語例¹⁰⁾をどんどん口にした。生徒たちが挙げた同形語例について分析したとき、生徒たちは前の段階よりおもしろがる姿を見せた。特に「卓球」と「乒乓球」という語に対して、全員が驚きの声を上げた。授業者は生徒たちが挙げた語について、日中での詳細を説明する際、同形語のつもりで言ってもらった日中両語が、同形関係を成す(「中国」「炒飯」など)、或いは、同形と言えないが、近い形を持っている(「洗濯」など)、或いは、全く異なる形になる(「漫才」など)など、さまざまな様相を呈していると説明した。具体的な語について説明したとき、その裏にある日中両国での発想の違いを取り上げた。このような文化の違いが見られる場面に、生徒たちは強い興味を示した。また、生徒たちが取り上げた語の中で、日中同形語になるのがごくわず

かであったことについて、決してそれが同形語の日中両語で占めている割合の一般状況を表しているわけではないと指摘した。

次に、10分の休憩の後、9つの「同形異義語」を紹介するステップに入った。ここも中学校の場合に似ているが、授業者は、例文は日本語であるが、同形語の方は中国語の意味を取っており、その前後の文脈を念頭に置きながら、漢字そのものの意味をも考えるべきであるとまえて説明した。生徒たちが議論を行った際、授業者は適宜ヒントを与えたりした。そのとき、生徒たちは楽しそうに見えたと同時に、質問に答えられるようにと真剣に考える姿も見せた。生徒たちが積極的に発言するように、そして、その発言がねらった語に近づくように、授業者は実践の目標を心にかけて励ましの言葉を言い続けた。最後に8人の生徒は全員違う語について発言できた。

生徒たちの発表についてコメントしたとき、生徒たちに今回の授業での内容に興味を持ってもらうため、授業者は、まず生徒たちが良くできた面を評価するように配慮し、それから、また自らの意見を述べ、生徒たちが納得することを求めた。つまり、生徒たちが積極的に考え、そして授業に参加することを重視した。

ゲームの段階を終えてからは、同形異義語の日中両語における差異とそれが生じた原因について説明した。例文が多かったが、生徒たちは静かに聞く姿を見せて、理解しようとするように見えた。

最後に、授業についての感想などを記入するアンケートを行い、板書をまとめたメモを配布した¹¹⁾。また、生徒たちの名前の中国語での書き方と読み方も紹介した。生徒たちは皆新鮮に感じているような顔で自分の名前の外国語での書き方と読み方をおもしろがっていた。

2.5 アンケート調査の結果とその分析

授業実践の最後に、生徒たちの授業に対する態度、授業内容の設定への評価、興味・関心の持つところ、授業を通して得たことや気づきなどの情報を把握し、授業目標の達成度に対する考察を行うため、質問欄と感想欄からなるアンケートの調査を行った。その結果、授業の価値を論じるのに参考となる貴重な情報を収集することができた。以下、アンケート調査の結果とその分析を箇条書きの形にまとめる。

➤ 授業実践において、ほとんどの生徒はよいイメージを持ち、アンケートの結果によれば、半分以上の生徒は中国や中国語、漢字への興味が大変高まり、以前とかわらない生徒は5%に至らない。また、日中両語における特別な関係に気付いてもらうこともできた。まとめると、授業の中で、生徒たちはこれまで知らな

かった日中両語で同じ漢字を用いる漢字語の発音や意味、両者の深いつながりなどについて、驚きと不思議を感じたと同時に、楽しい形で勉強できたことのようなことを書いた生徒は多かった。一方、時間の関係で生徒たちに十分に理解してもらえなかったところもあった。

➤ 授業では、生徒たちにも参加してもらった形式を取った。それが、生徒たちが授業に興味・関心を持つのにプラスの効果をもたらした、授業目標の達成にも積極的な役割を果たしたことが生徒たちのアンケート調査での記述によって明らかになった。

➤ 授業の内容は漢字、漢字言葉であったが、生徒たちは学習形式や外国語との比較、同形語という特別な言語現象などに新鮮さを感じたようである。授業を受けてから、「漢字がおもしろい」と答え、「漢字の勉強をしたくなかった」生徒が多いことから、同形語の授業実践は国語教育にも貢献できると言えよう。

➤ 高学年になるにつれ、アンケートへの記入は漸次に少なくなっていく。それは、授業でアンケートを書いてもう時間を取れなかったことが一つの原因であるが、学年が上がるにつれ、生徒たちのアンケートで回答することに対する態度が少しずつ消極的になっていった。特に高等学校と小、中学校との間の差が大きい。それは、日常生活経験や物事に対する受け取り方などが成長する時期にいる子どもにおける自然な反映だと捉えてよからう。

➤ 授業実践では、生徒たちに興味・関心を持たせるために、まず中国語でそれから日本語で自己紹介をする形式を取った。その結果、発音に対する生徒たちの反響が意外と強かった。アンケート調査の結果とその集計資料における生徒たちの記述から見ると、その後の授業の中でも、多くの生徒が発音のほうに惹かれていた。これは授業実践の本来の目的からは少しずれているが、授業の広がりとして、その方面への発展を考える際、重要なポイントだと受け止めることもできる。

2.6 まとめ

授業実践を振り返って、最も目立つ点として、生徒たちが中国語の発音、日中同形語の意味・用法における異同、異文化理解に強い関心を抱けたことが挙げられる。更に、漢字への興味の向上や、中国語学習への関心の芽生え、漢字によって結ばれた日中両言語間の特別な関係への認識などがアンケートに多く言及されている。生徒たちは日中同形語の授業実践を新鮮な気持ちで受け止め、日中両語を比較することを通して、同じく漢字文化圏にある日本と中国を改めて見直すことができたのであろう。

授業対象の学年が上がっていくことと授業の時間の

長さに応じて、各実践で用いる同形語の語例も変わったりしている。また、授業の展開の広さと深さも異なる。これらの差異は各実践での目標の差異によるものである。もちろん、最終目標は既述した授業実践の目的と一致するが、実際、中学校と高等学校において、この最終目標の達成度合いに多少の差が見られる。

生徒たちは授業の際、外国人が授業をすることに強い興味を示し、授業を通して、体で異国言語に触れて異国文化を感じられたようである。生徒たちの漢字への興味の向上、日中両語の複雑且つ緊密な関係―共通点と相違点が共存すること―への気づき、及び異文化理解意識の育成を求めるといふ本実践の目標がある程度達成できたと考ええる。一方、今回の授業実践について、時間の制限などのため、授業の到達レベルは異国言語と異文化理解への興味・関心の芽生えを育むという異文化入門の段階に止まっているとも言え、生徒たちに異国言語と異国文化に対する興味と理解から自国言語や自国文化に振り返る意識を持たせるに至ったとは言い難い。また、実践は、日本では以上のような結果を得ているが、同じ内容の実践を中国で行う場合はどうなるのだろうか。今後の検討すべき課題として残されている。

また、実践において反省すべき点が多く、例として以下のような点を挙げ、今後研究の注意点として扱いたい。

➤ 筆談すると設定したゲームの中で、授業者はコメントするとき、日本語と中国語との関係や、日中両国の間のつながりなどについて、もう少し生徒たちに考えさせたら、より実践の目標に近づくことができたのかもしれない。

➤ 中学校の授業の際、最後に5語に関する質問は難しすぎて、十分な配慮はできていなかった。その質問は回答と理由の二段階に分けて考えさせるのが適切なようである。

➤ 例文の適切さが欠けていた。例えば、中学校の授業で使った「妻子」「顔色」の例文である。生徒たちにとって、その例文の文脈で授業者のねらった語を考え出すのは困難なことであった。

3. おわりに

本稿では、日中同形語という漢字文化圏における特殊現象に着目し、学問的研究成果の教育分野への活用を目標に、日本の中学校と高等学校で日中同形語を用いた授業実践を試みた。更に、総合的な学習の時間を利用し、学校の漢字学習における現状を改善することも一つのねらいとし、日中同形語を用いた。その結果、

生徒たちは日中同形語の勉強を体験することによって、漢字学習に新しい認識を持ち、異国言語、異文化にも興味を持つようになり、「異国言語交流と異文化理解」という授業実践の目標がある程度達成できたと言える。しかし、生徒たちに異国言語と異国文化に対する興味と理解から自国言語や自国文化に振り返る意識を持たせるには至らず、反省すべき点も多く残っているため、今後更なる改善が必要である。

本研究における実践はこれまでの日中同形語と漢字語に関する研究の成果をベースに行ったものである。大いに改善の余地があるが、学校の生徒という特別な対象設定で、理論研究の成果を異文化理解の分野で活用できた結果から、本実践は日中同形語研究の新しい展開として位置づけ、日中同形語の新たな研究形式を提示することができたと言えよう。また、日中同形語を用い、異文化理解を目指した授業実践は、語学研究成果の異文化理解への活用方法の一端を示すことができたと思われる。これらの点において、今回の試みが有意義な成果を取めたと考える。

【付記】

授業実践にあたり、多大なご理解とご協力をいただきました諸先生方に厚くお礼を申し上げます。

【注】

- 1) 荒川 (1979) 曾根 (1988) 上野・魯 (1995) 大河内 (2000) 張 (2004) など
- 2) 『愛媛国文と教育』37 (2004 pp.1-15) を参照
- 3) 小学校の部に関する内容がすでに報告してあるため、ここでは省くことにする。詳細は注2) の論文を参照。
- 4) 時間のことを考慮し、生徒たちに言ってもらう語を10個と設定した。
- 5)

日本語	眉毛	教科書	餃子	日本	国
中国語	眉毛	教科书	饺子	日本	国家
金	筆箱	杏仁豆腐	老若男女	茶	
钱	笔袋	杏仁豆腐	男女老幼	茶	

- 6) 授業の際は赤ペンを使用した。付録の資料には下線を引いておいた。
- 7) 授業実践資料③を参照。ただし、紙幅の関係で一部のみ掲載。
- 8) 授業実践資料①に類似。紙幅の関係で掲載を省略。
- 9) 授業実践資料①に類似。紙幅の関係で掲載を省略。

10)

日本語	野球	携帯	漫才	秋桜	北朝鮮
中国語	棒球	手机	相声	大波斯菊	北朝鮮
家事	洗濯	中国	洋服	炒飯	卓球
家务	洗涤	中国	西服	炒饭	乒乓球

- 11) 授業実践資料②③に類似。紙幅の関係で掲載を省略。

【主要参考文献】

- 日本語教育研究資料『中国語と対応する漢語』(1978) 文化庁
 荒川清秀 (1979) 「中国語と漢語 文化庁『中国語と対応する漢語』の評を兼ねて」『文学論叢』(愛知大学) 62 pp.1-28
 石堅・王建康 (1983) 「日中同形語における文法的ズレ」『日本語と中国語の対照研究』別冊 pp.56-82
 曾根博隆 (1988) 「日中同形語に関する基礎的考察」『明治学院論叢第424号総合科学研究』30 pp.61-96
 秦鋒 (1988) 「中日同形異義語についての研究」『国語の研究』12 pp.1-19
 橋純信 (1994) 「現代中国語における中日同形語の占める割合」『国際関係学部研究年報』15 日本大学国際関係学部 pp.99-116
 上野恵司・魯曉琨 (1995) 『おぼえておきたい日中同形異義語300』光生館
 飛田良文・呂玉新 (1995) 『日本語・中国語意味対照辞典』(増補新装版) 南雲堂
 潘鈞 (1995) 「中日同形詞義差原因浅析」『日语学习与研究』82 pp.18-23
 王承云 (1998) 「同形異義語における中国語と日本語の対照研究 中国語教育の視点から」『人文科教育研究』(人文科教育学会) 25 pp.143-152
 翟东娜 (2000) 「浅析汉日同形词的褒贬色彩与社会文化因素」『日语学习与研究』101 pp.32-35
 大河内康憲 (2000) 「日本語と中国語の同形語」『日本語と中国語の対照研究論文集』pp.411-447
 吴佩 (2000) 『日语词汇研究』上海外语教育出版社
 陳力衛 (2001) 『和製漢語の形成とその展開』汲古書院
 林玉恵 (2001) 「日中の対訳辞典からみた日中同形語記述の問題点 同形類義語を中心に」『ことば』(現代日本語研究会) 22 pp.141-151

株式会社造事務所 (2003) 『3日でマスター 中国人と筆談する本』 大泉書店
 張麟声 (2004) 『日中ことばの漢ちがい』 くろしお出版 (主任指導教員 町 博光)

【授業実践資料】

資料①

テーマ			
自分→自分を取り巻く環境・文化・他者→世界		→ かかわり合う力	
授業の目標			
普段使い慣れ、親しみを感じる漢字語を、中国語との比較を通して、驚きと同時に、漢字文化圏における言語の独特のおもしろさ・素晴らしさを生徒に自らの経験で実感させ、「日中同形語」の勉強によって、両国の考え方や習慣の違いを理解してもらう。そのことで、自国言語・自国文化への再認識を喚起し、他者意識・他国文化に対する興味・関心を持たせる。			
板書計画：漢字をカン（漢）違い？！			
ここでの日中同形語とは？		日本にも中国にもある同じ漢字で書く言葉	
同形語	同形語文(或いは句)	訳文	類型
学校	毎日 <u>学校</u> へ行く	每天去学校	意味・用法がほとんど同じ
	在 <u>学校</u> 吃饭	学校でご飯を食べる	
大意	小説の <u>大意</u>	小说的大意	意味・用法の一部が共通する
	段落 <u>大意</u>	段落的大意	
	粗心 <u>大意</u>	うかつ・不注意	
	傘を差して自転車に乗るの	撑着伞	意味・用法が異なる

大丈夫	は <u>大丈夫</u> ？	骑自行车没事吗？		
	男子汉 <u>大丈夫</u>	男 一匹・一人前の男		
同形語	文(下線の部分は中国語の意味を取っている)	下線の語は、普通なら日本語は？	下線の部分の中国語	日中同形語の日本語表記の意味に当たる中国語
顔色	彼は黒い <u>顔色</u> が好き	色	顔色 (yán sè)	臉色 (liǎn sè)
妻子	彼の <u>妻子</u> は女優だ。	妻	妻子 (qī zi)	妻子和孩子 (qī zi hé hái zi)
新聞	テレビでイチローの <u>新聞</u> があった。	ニュース	新闻 (xīn wén)	报纸 (bào zhǐ)
先生	李 <u>先生</u> は会社員だ。	さん	先生 (xiān sheng)	老师・医生 (lǎo shī・yī shēng)
手紙	<u>手紙</u> でお尻を拭く。	トイレトッパー	手紙 (shǒu zhǐ)	信 (xìn)

資料②

秦 春芳へのメッセージをお願いします！

年 組 氏名

(選択肢から一つを選んでその理由を書いて下さい)

- 今回の授業はおもしろかったですか。
 - 大変おもしろかった
 - まあまあおもしろかった
 - 普通
 - あまりおもしろくなかった
 - おもしろくなかった
 理由：
- 今回の授業で漢字への興味が高まりましたか。
 - 大変高まった
 - 少し高まった
 - 以前と変わらない
 理由：

3. 今回のような言語学習と異文化理解の授業が好きですか。

- a, 大変好き b, まあまあ好き
c, 普通 d, あまり好きではない
e, 好きではない

理由:

4. 漢字や言葉, 文化(例えば: 考え方・習慣)などの面における日本と中国の関係について, 何か感じたことがありましたか。

そのほか, この授業で気づいたことや感想・アドバイスなどを何でもお願いします。

ありがとうございました!

資料③

日中両語における意味・用法の差異, 或いは差異が生じる原因:

先生: 「先生」は字面の意味は「先に生まれた人」です。

そのために, 教養も経験もあり, 尊敬すべきだと思われれます。そのイメージから昔の中国では「先生」は「教師」のことを指していました。にも関わらず, 「先生」は日本語と中国語の中で違う形で変容して, 意味にズレが生じました。現在の中国大陸では「先生」は見ぬ知らぬ人や仕事関係の人など, あまり親しくない, 敬うべき人(男性, 年齢に関係なし)のことを指すようになっていきます。一方, 日本では教師のことは引き続き「先生」と言い, 弁護士, 医者なども「先生」と称していますが, それ以外の職業にはほとんど使っていません。

手紙: 日本では「手で文字を書く」ということから, 古い時代から「手」を文字のことを指し, 文字を習うことを「手習い」と言っていました。それだけではなく, 女性の書いた字も「女手」と言っていました。一方, 中国語では「手」の本来の意味を便の隠語として発展させています。例えば, トイレに行くことを「解手」(手を解く)と言い, 小便のことを「解小手」, 大便のことを「解大手」と言います。そこで, そのような便の「手」のための「紙」ですから, 「手紙」はトイレトーパーになるわけです。